

## II-1. 太平洋地域への人類拡散・海洋文化館所蔵カヌーの調査と建造プロジェクトの意義

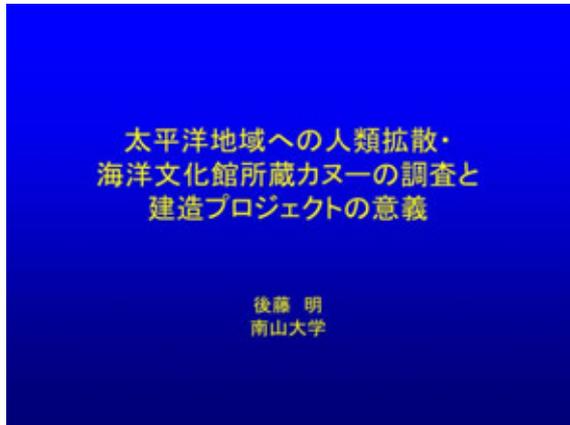
南山大学教授 後藤 明

(後藤 明)

それでは、引き続きまして、私の講演に入りたいと思います。

私は、今海洋文化館にある、タヒチのダブルカヌーの来歴について、それから、クラカヌーというカヌーの来歴についてお話します。この10年間リニューアルの仕事をするに当たって、こういう大型カヌーを造った実際の島や村に行って、その記憶がある方がいるかどうか等を調べる来歴調査をしてきました。今日はその話を中心にしていきたいと思いません。

これは先ほどの須藤先生のお話と重なりますが、1975年から76年にかけて行われた海洋博覧会の大きなイベントとしまして、チェチェメ二号がサタワルから沖縄に来ました。この75年、あるいは76年あたりの年代を覚えていただきたいと思うのですが、同じように、ハワイではホクレア号という伝統カヌーが復元されました。75年が完成で、最初のタヒチ航海が76年に先ほど出ましたマウ・ピアイルクの指導によってなし遂げたということでもあります。



1976年ホクレア号最初のタヒチ航海を出迎えた  
「マーロン・ブランド」カヌー



これも先ほど須藤先生のお話に出た写真と同じですが、ホクレア号が 76 年にタヒチに着いたときにここで出迎えたタヒチ型のダブルカヌーがあります。これは実はタヒチの人に言わせると「マーロン・ブランド」カヌーと言われるカヌーです。マーロン・ブランドというのは、俳優のマーロン・ブランドに由来します。この写真は昔の古い展示のほうですが、実はその流れの中でこの海洋文化館のカヌーもできたお話をしていきたいと思います。

復元建造された  
タヒチ型ダブルカヌー  
の来歴調査



1770 年代にイギリスのキャプテン・クックが太平洋中を探検して、このような大変貴重な絵や図面を残しました。これはタヒチのダブルカヌー。1 隻だけですが、タヒチで当時造られていたダブルカヌーをかなり正確な図面でクックは残しています。

話は変わりますが、実は 1960 年代にハリウッド映画「バウンティ号の叛乱」という映画がありました。バウンティ号というのは、キャプテン・クックの死後に、その士官だったブライ船長という方が船長になってタヒチに探検に行ったときの話です。ブライ船長はかなり厳しい人で、規則を破った水兵を公開でむち打ちしたり、拷問で何人か死んだり、タヒチに来る途中で厳しいことをやったために、タヒチに着いてから水兵たちが反乱を起こしてしまいます。一方、タヒチ娘に水兵たちがすごくもててしまったのですが、水兵たちは地位が低いですから

イギリスに戻っても大した職もないかもしれない。このまま船に乗っていると厳しい仕打ちを受けるということで、反乱を起こしてしまいました。彼らは船長を救命ボートで流して、自分たちがバウンティ号を乗っ取って、そしてタヒチ娘たちと夫婦になったのですが、タヒチにも結局いられなくなってピトケルン島という別の島に行ってしまう、という話があります。

そのときに反乱を指揮したフレッチャー・クリスチャンという人がいました。この方は位の高い士官ですが、船長の過酷な仕打ちを批判して水兵たちと一緒に反乱を起こしたという大変有名な話です。映画はアメリカやフランスでは何度もリメイクされて、たしか 5 回ぐらいリメイクされたと聞いています。その中でも 62 年にリメイクされたのが出色の出来です。クリスチャンを演じたのが主演マーロン・ブランドです。この映画はタヒチで実際にロケをして、古代の大型カヌーを何隻か実際に復元して、また小さなカヌー船

団も復元をしました。カヌーを漕ぐタヒチ人を実際にエキストラに使って、タヒチでつくった映画なのです。その前後の同じ「バウンティ号の叛乱」は、ロケ地がバハマ諸島など別の場所だったり、カヌーの作りもかなりいいかげんですが、この映画は人類学者が監修をして、当時のタヒチの文化をかなり正確に復元した映画で、本当に出色の映画です。

タヒチ島にはタウティラ村という村がありますが、そこはキャプテン・クックもカヌーづくりの村として描いている大変有名な村です。今でもタウティラ村では小さなカヌーを造っています。その人たちが映画に出てくる大小のカヌーを造りました。それを指揮したのが当時の村長のトゥタハ・サロモンという村長さんで、この方が、今そこに皆さんエントランスで見るタヒチのダブルカヌーを造った方でもあるのです。彼が指揮をしてタウティラ村で造ったのです。つまり、タウティラ村の人は 60 年代にハリウッド映画のために伝統的なカヌーを造ることを一度経験していたのですね。つまり彼らは古代カヌーを造るというモチベーションも持っていた。それで、たまたま海洋博のために日本人から頼まれてもう一隻造ったという、そういう経緯があります。



そして、これをデザインしたのがハーブ・カネさんです。ホクレア号をデザインした人でもあるので、ほとんど同じ時代にタヒチのダブルカヌーをデザインしているわけです。これはカネさんの描いた絵ですけれども、これをベースに造りました。クック船長の絵図が基になっています。これは 75 年、タヒチのパペーテ港で行われた進水式です。私がハーブ・カネさんから直接写真をいただいています。これが沖縄に運ばれて、今皆さんごらんになっているようなカヌーになっているという来歴があります。

カネさんは大変なカヌー研究家でもありますので、カヌーを造るときにかなり細かい指示を何通もの手紙で指示しています。その一部が下に展示されていますから後でごらんになっていただきたいと思います。例えば、「これはポリネシア型のダブルカヌーだからポリネシア型の組み紐を使え」と、「ミクロネシア型の撚り紐ではない」みたいなことを書いています。両方ともココヤシの繊維でつくりますが、ポリネシアの紐とミクロネシアの紐というのは少し違います。そういう指示までちゃんとしています。



私はこの海洋文化館のリニューアルの一環でタウティラ村に行く機会がありました。そうすると、覚えている人がいて、この場所であるカヌーは造ったということを教えていただきました。この電信柱から電気をとって電灯にして、みんな昼間は普通に仕事していますから、夕方になってみんな造った、などという話も聞いたりしています。それから、最初

にこの海岸で進水をしてバランスをとった、といった具合の話が、今でも村に行きますと出てきます。

それで、大変感動したのは、当時の船大工の棟梁の奥さんがご存命であったことです。この奥様に、これは昔の海洋文化館の展示の写真をお見せしたところ、奥様とても驚きまして、感動して、そして体が震えてきて、「自分の亡くなった夫の魂が今その辺に戻ってきて、上からうれしそうに見ているのがわかる」と言うのです。本当にそれくらい感動していただきまして、タヒチ語では「マウルール」というのは「ありがとう」という意味ですけれども、何度も私たちの手をとって「マウルール」と言ってくれました。すなわちこういうカヌーをとっておくとか、保存しておくとかいうのはいかに大事な事かと、特に太平洋の人にとって大事な事かということ、本当に身をもって感じた瞬間でありました。彼女にとっては死んだと思っていた子どもに巡り会った、そういう面持ちだったのでしょう。



もう一つは、今度は後ろのほうに展示されていますクラカヌーと言われるカヌーで、これはニューギニア近辺で交易に使われる文化人類学的にはとても有名なカヌーですけれども、この来歴調査にも私は行ってまいりました。

先ほども須藤先生のお話に出ましたが、70年代に『すばらしい世界旅行』という伝説的な番組があって、その中で取り上げられたカヌーでもあり、実際にその映像に出てきたカヌーは首長のトコバタリアという人が乗ったカヌーです。実際にトロブリアンド諸島のキリウィナ島というところに行きますと、覚えている方がたくさんいて、あのカヌーはもう伝説的なカヌーだと。「あのカヌーに乗っていくと交易がうまくいく」みたいな語りも今でも残っております。



この方は、あのカヌーを造った首長の息子と言われる方（実際は母方の甥）で、今、島の文化復興運動の中心になっている方です。彼もクラカヌーを復活させたいと言っています。こんな本も書いているのですが、肝心のクラカヌーを復元するためのモデルがないのです。確かにトロブリアンド諸島に行っても、はっきり言って大したカヌーはもうないのです。昔のような、ここにあるような立派なカヌーはもう現地では造れないのです。だから、ぜひもう沖縄にあるカヌーの図を見せてほしい、ということをおっしゃいました。

カヌーにはちゃんと名前が一つ一つあります。トイラムラ・グーヤウ、「首長の死を悼む」というような意味です。大規模なクラ交易は著名な首長の追悼のために行われることが多いのです。さてこのクラカヌーが 70 年代海洋文化館に運ばれて以降、同じ名前を持ったいわば 2 世号が 80 年代にもう一度造られたのです。それはニュージーランドのテレビの収録にも使われました。そのカヌーはその後テレビ収録が終わってから普通に野ざらしにされていたといいます。大体カヌーは外に置いておきますから、もう朽ち果ててしまっただけで存在しないのです。つまり、1 世号は海洋文化館の中で残っていて、2 世号がもう存在しないという、こういう関係になるわけです。ですので、やはり、さっきのタヒチのダブルカヌーと同じように、このクラカヌーも現地の人に写真を見せると、本当に死んだと思っていた子どもに 40 年ぶりにめぐり会ったという、そういう驚きと感動を示していただくこととなります。

それで、私は、昔、首長のトコバタリアがいたシナケタ村という村に行きまして、このカヌーに乗った人がいないかどうか調べて回ったら、子どもころ乗った 2 人の古老が見つかりました。そのころちょうどこの人たちは 10 歳ぐらいだったので、水をかくあかきみ、子どもは最初にそれが仕事なのですが、あかきみをこのカヌーの中でやっていたという人が 2 人見つかりました。お二人とも、もう驚きというか感動というか、こちらのおじいさんなんかは「自分だけ生き残ってこのカヌーにめぐり会えて、死んだ仲間に申し訳ない」みたいな、涙を流して感動を示していただきました。このように先ほど言いましたように、古いカヌーをとっておくというそのこと自体、大変大事なことです。この海洋文化館にあるこのような資料は、カヌーに限らずですが、大事にすべきです。なぜならそれらは太平洋の人たちともう一度文化的なつながりをつくっていくための大事なツールになるからです。

私たちはリニューアルの過程で正確な 3D 画像もレーザー測量でつくっております。これがダブルカヌー、こちらがクラカヌーのほうです。こういうデータも将来的には、もし現地の人々が伝統的なカヌーをもう一度造りたいということをやったら、ご協力してさしあげたらいいのではないかと。これは本当に 3D 画像で、バーミヤンの石窟寺院なんかの 3D 画像をつくった専門の会社の方をお願いして、彫刻なんかの凹凸もかなり正確に復元されています。今こんなきれいな彫刻は現地の人でも彫れないです。ですので、彼らにとっても貴重な資料になっていくであろうと思っています。

### タウティラムラのサロモン村長の手紙とデザイナーのハーブ・カネ氏の手紙とともに展示されるダブルカヌー



### 2013年海洋文化館の新展示完成

### 3隻の大型カヌー



### 太平洋各地に飛び火したカヌールネサンスの動き

海洋文化館が今ごろんになっているように新しく誕生しまして、エントランスにダブルカヌーが置いてあります。これがそのデザイナーであるハーブ・カネさんの遺影です。残念ながらハーブ・カネさんは私がインタビューした1年後ぐらいに亡くなったのですが、カネさんのこのカヌーを造るための指示する手紙なんかと一緒に展示されています。それから、当時タウティラムラのサロモン村長から日本人に向けたタヒチ語の手紙があります。財団さんが手紙を保存してありましたので、これも展示してあります。簡単に言いますと、「タヒチと日本の友好のためにこのカヌーを日本に贈ります」というような内容のお手紙です。

さて背後に大きなカヌーが3隻展示されています。これが先ほどお話ししたクラカヌー、これがラカトイカヌー、これが新しく造りましたリエン・ポロワット号です。これは門田さんなどのお話で詳しくされると思うので省略します。実はこのラカトイを日本に運ぶときの担当者に出会うことができました。その方は当時、日本でいえば教育長みたいなことをやられていた方です。その後、その方はパプアニューギニア国の副首相までなられて、今は政治から身を引いて天然ガスの会社の社長さんになっています。

これは須藤先生のお話と全く同じですが、太平洋各地に海洋文化館というのが、あるいは海洋博覧会というのが太平洋のカヌールネサンスの一つの先駆けになったということでもあります。今は太平洋中でこういうカヌールネサンス、カヌーフェスティバルというのが行われています。

太平洋各地に飛び火したカヌールネサンス：  
パプア・ニューギニア

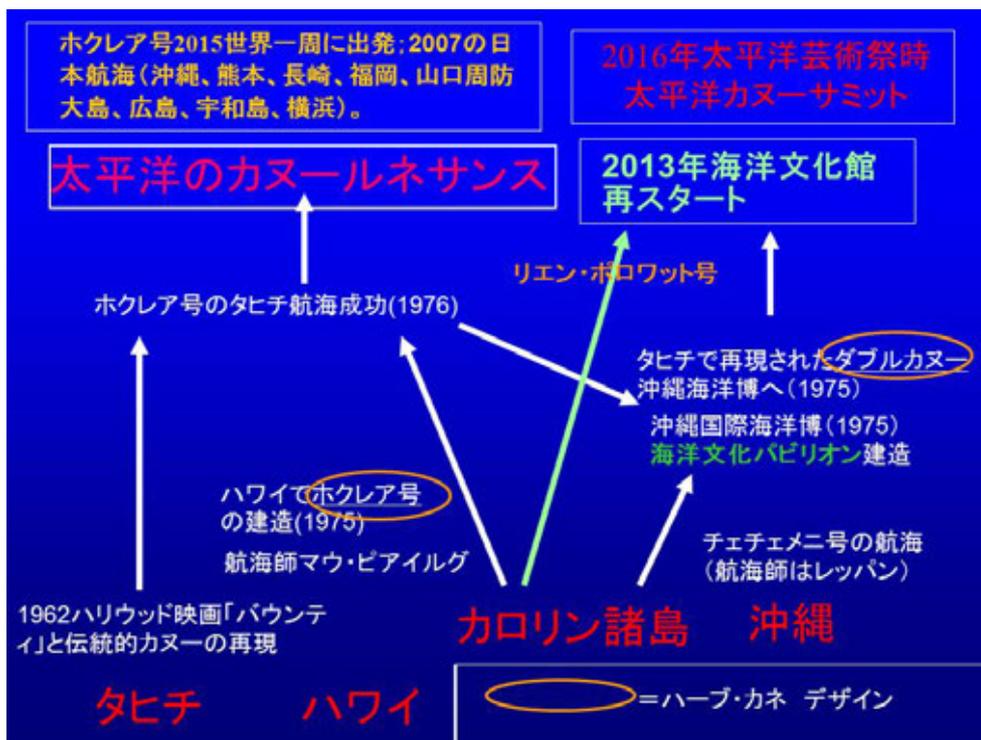


これはリニューアルの過程で私が調査に行ったパプアニューギニア国のカヌーフェスティバルで、毎年11月ぐらいに開催されます。いろんなところからカヌーが集まってきて、カヌーのレース、あるいは歌、踊りの競技みたいなものが行われ、カヌーというのをベースにしながら文化復興が進んでいるということでもあります。

各地の型式の異なるカヌーが集まる  
(模型展示参照)



これはトロブリアンド諸島からきたクラカヌーです。これは割ときれいに造られているのですが、やはりここにある海洋文化館のカヌーのほうがレベルとしては上かなと思います。いずれそういうものがどんどん復活していく兆しがありますので、期待したいと思います。



これはちょっと細かい図なのですが、要するに 60 年代のハリウッド映画「バウンティ号の叛乱」があった。これが一つの 60 年代の動きであって、次に 70 年代の中ごろにホクレア号の建造。それから、ほぼ同じころに海洋博覧会の開催がありました。この同じオレンジ色で囲まれたカヌー、ホクレア号と海洋文化館のタヒチ型ダブルカヌーが同じ人、ハーブ・カネ氏のデザインであったということです。その後、ホクレア号のタヒチ航海が成功して、カヌールネサンスの先駆けとなり、その延長上で 2007 年にホクレア号が日本航海をして、今日お見えになっているカイウラニさんも日本にいらしたときに、昔の海洋文化館をごらんになっています。

そして今ホクレア号が世界一周の旅に出ている。それとは別に、2013 年に海洋文化館が再スタートしたということも、こういう太平洋のカヌールネサンスの歴史の中で並行する現象として相互に刺激しながら起こっていつている。つまり、海洋文化館がいかにかつう流れの中の中心の一つとしてどっぷりつかって、そのルーツの一つを形成しているのかわかるかと思ひます。私の今の研究の大きなテーマですけれども。

これが最後のスライドです。先日グアムで太平洋芸術祭というのが行われました。そのときに私どもは太平洋カヌーサミットというのを主催いたしました。東京文化財研究所の石村智さんはこの博物館リニューアル時の考古学部門の監修をされた若手考古学者です。石村智さんと私が提唱しまして、日本のユネスコの世界遺産委員会の方と協力をして、各地のカヌー関係者に呼びかけ、このような大きな集まりを持つことができました。太平洋のカヌールネサンスを語る時、まず75年あたりが一つの大きな出来事がありましたね。ホクレア号があり、海洋博やチェチェメニ号があり、その後にホクレア号の努力などによって太平洋へカヌールネサンスが飛び火していった。そして、この2016年になってそういう人たちが一堂に会するような大きな会議を開催することができたということは大変大事な出来事ではないかと思えます。幸い、この海洋博公園の美ら島財団もこの会議の一翼を担うことができまして、海洋文化館の情宣も行うことができましたので、今後、海洋文化館はここにいる太平洋の人たちと手を組んで、沖縄も含めて海洋文化、カヌー文化の発展に中心的な役割を果たしていくべきだし、また役割を果たしていくような資料を備えた博物館であろうと確信しています。

以上をもちまして私の発表を終えたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

